

慶應義塾大学 SFC研究所

看護ベストプラクティス
研究開発ラボラトリ

Report of 2017

看護ベストプラクティス研究開発・ラボ

Laboratory on Innovative Research and Practices for Nursing

開設：2012年3月1日

代表者：武田 祐子（看護医療学部教授）

関連 Web Site：<http://www.kri.sfc.keio.ac.jp/japanese/laboratory/nursing.html>

連絡先：慶應義塾大学看護医療学部

本ラボラトリーは、最善の看護実践（ベストプラクティス）に不可欠である、(1) 看護実践の質保証 (Quality) を推進する実践研究開発、(2) 個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及 (Utility) できる看護リーダーの養成、(3) 当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成 (Explore)、をめざすものである。

■メンバー

武田 祐子（看護医療学部 教授）	ラボラトリー・リーダー 遺伝看護実践研究開発
小松 浩子（看護医療学部 学部長）	がん看護実践質保証研究開発
太田喜久子（看護医療学部 教授）	高齢者看護実践研究開発
野末 聖香（看護医療学部 教授）	精神看護実践研究開発
宮脇美保子（看護医療学部 教授）	倫理的看護実践研究開発
藤井千枝子（看護医療学部 教授）	看護技術研究開発
永田 智子（看護医療学部 教授）	倫理的看護実践研究開発
小池 智子（看護医療学部 准教授）	ベストプラクティス先導ナース開発研究
矢ヶ崎 香（看護医療学部 准教授）	がん看護実践質保証研究開発
小山友里江（看護医療学部 准教授）	がん看護実践質保証研究開発
福井 里佳（看護医療学部 准教授）	倫理的看護実践研究開発
福田 紀子（看護医療学部 准教授）	精神看護実践研究開発
朴 順禮（看護医療学部 専任講師）	看護実践研究開発
新幡 智子（看護医療学部 専任講師）	がん看護実践質保証研究開発
山本 亜矢（看護医療学部 専任講師）	倫理的看護実践研究開発
田村 紀子（看護医療学部 助教）	がん看護実践質保証研究開発
榊原 直喜（看護医療学部 助教）	がん看護実践質保証研究開発
真志田祐里子（看護医療学部 助教）	高齢者看護実践研究開発
高畑 和恵（看護医療学部 助教）	看護実践研究開発
瀧田 結香（看護医療学部 助教）	看護実践研究開発
西池絵衣子（看護医療学部 助教）	精神看護実践研究開発
緑川 綾（看護医療学部 助教）	精神看護実践研究開発
井ノ下 心（看護医療学部 助教）	がん看護実践質保証研究開発
伊藤 麻美（看護医療学部 助教）	倫理的看護実践研究開発
小林 良子（看護医療学部 助教）	倫理的看護実践研究開発
木下ユリコ（看護医療学部 助教）	倫理的看護実践研究開発
佐藤 美樹（看護医療学部 助教）	看護実践研究開発
増谷 順子（SFC 研究所 上席所員）	高齢者看護実践研究開発

目的

医療現場では、日々新たな診断・治療が開発され、診療および看護はますます高度化・複雑化している。一方で、医療の効率化が叫ばれ、入院の短縮化、外来診療への移行が推奨され、患者や家族には通院による治療継続、セルフケアの促進が求められている。患者や家族は、移り変わる診療の場・環境のもとで、高度な医療内容を理解し、納得のいく判断のもとに診断・治療を受けることに多大な努力をしている。また、自身のワークライフと療養のバランスを上手にとることに力も注いでいる。複雑で高度化した医療の中で、＜安心と安全＞が保証され、＜医療に対する納得と満足＞が得られ、＜当事者の価値が尊重＞され、＜充実した生活や生き方＞ができるよう、最善の看護実践（ベストプラクティス）を提供する必要がある。

本ラボト리는、最善の看護実践（ベストプラクティス）に不可欠である、(1) 看護実践の質保証 (Quality) を推進する実践研究開発、(1) 個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及 (Utility) できる看護リーダーの養成、(3) 当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成 (Explore) 、をめざすものである。この目的のために、＜看護実践の質保証研究開発＞＜ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発＞＜倫理的看護実践のためのシステム構築＞の3つの研究グループを組織化する。研究グループには、臨床現場においてベストプラクティスを推進している看護専門職者のほか、本ラボト리의主旨に賛同いただける学外の研究組織、医療施設の方々を訪問研究員として迎え、共同研究をすすめる。忘れてならないのは、患者中心の視点をラボト리의根幹につねに置くことである。そのために、定期的に、市民フォーラムを開催し、患者団体、地域住民等との交流を行い、研究成果の発信、評価、意見交換を行っていく。各プロジェクトの内容を記す。

プロジェクト A: 看護実践の質保証研究開発

臨床現場における最善の看護実践のアウトカムは、患者の安全と安心の保証、患者・家族の医療に対する納得と満足、患者のQOLの向上である。患者アウトカムを促進するための最適なケアのエビデンスを集積し、標準化を行う。ロジックモデル等の質評価理論に基づいてケアの質改善デザインを設計し、標準化したケアの検証を行う。

プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及できるかは、＜医療イノベータ＞の役割を担う看護リーダーの活躍にかかっている。このプロジェクトでは、最適なケアと患者のアウトカムを促進するために、患者（個人、家族、またはグループ）や他の専門職との治療的関係と協働関係を結び、各チームやユニットにおいてケアの質保証システムを稼働し、ケアの改善を先導する看護リーダーの育成プログラムの開発、検証を行う。

プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

熟慮・納得のもとに、自身にとって最善の診療・ケアを選択する意思決定支援プログラムの開発と検証、および複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じ得る倫理的課題に対応する臨床倫理コンサルテーションシステム構築と実証をすすめる。併せて、組織的に倫理的看護実践が行えるケアリング風土の醸成を探索する。

研究活動計画の概要

プロジェクト A: 看護実践の質保証研究開発

患者アウトカムを促進するための最適なケアのエビデンスを集積し、標準化を行う。

プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースの開発

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及できるリーダーナース、臨床指導ナースの能力・役割を特定化し、キャリア開発プログラムを検討する。

プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

事例検討により、複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じる倫理的課題について検討する。

1. 経口抗がん薬治療を受ける患者のアドヒアランスに関するケアの開発 (RCT)
2. 化学療法の副作用症状 (末梢神経障害、皮膚障害) に関わるリスクイベント (転倒) と QOL に関する研究
3. 若年女性がん患者の妊孕性温存に関する意思決定支援統合ケアモデルの開発
4. 「身体活動コミュニティワイドキャンペーンを通じた認知症予防介入方法の開発」
— フォーカスグループを用いた質的研究 —
5. 地域在住超高齢者 (95 歳以上) の世界観: 質的研究

小松 浩子 慶應義塾大学看護医療学部 教授
矢ヶ崎 香 慶應義塾大学看護医療学部 准教授

A. 目標

がん患者中心の最善のケアの提供を目指し、看護実践の開発、実践への適用、普及を推進する。さらに高齢者を対象とした共同研究を推進し、超高齢者社会が進む日本から国際的に成果を発信する。

B. 計画および実施過程

1. 「安全、安心ケアネット構築」のプロジェクト: 多施設共同研究による「経口抗がん薬の服薬自己管理支援プログラムの有効性: ランダム化比較試験と質的研究による Mixed Method」の調査を推進する。
- 2-1 「安全、安心ケアネット構築」のプロジェクト: 抗がん薬治療に伴う手足症候群によるリスクイベントの調査のデータ収集を継続、データ解析、論文作成、投稿を進める。
- 2-2 分子標的治療を受けるがん患者の皮膚障害と QOL に関する調査のデータ収集を継続、データ解析、論文作成、投稿を進める。
- 2-3. 化学療法誘発性末梢神経障害のある乳がん患者の転倒に関する研究について、論文作成、投稿を行う。
- 3-1. 「若年女性がん患者の妊孕性温存に関する意思決定支援統合ケアモデルの開発」に関する看護師を対象にした質的研究 (フォーカスグループ) は論文を作成し、投稿する。
- 3-2. 上記の調査に関連したがん患者を対象に実施した質的研究は論文を投稿する。
4. 「身体活動コミュニティワイドキャンペーンを通じた認知症予防介入方法の開発」の分担研究として質的研究を推進し、データ分析、論文作成、投稿を行う。
5. 超高齢者の健康長寿研究 (新村班) の一部として、地域在住超高齢者 (95 歳以上) を対象とした質的研究を開始し、インタビューによるデータ収集、分析、論文投稿を行う。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

- 1-1. RCT の研究は研究協力施設を 1 施設加え、4 施設で調査を推進した。現在、参加登録者 164 名に達したため、新規登録を終了し、フォローアップデータを追跡している。4 施設中 2 施設は調査を完了した。
- 2-1 と 2-2 はデータ解析、論文作成を進め、各論文は採択された (Komatsu, et al. in press;

Yagasaki, et al, 2018)。

- 2-3. 化学療法誘発性末梢神経障害のある乳がん患者の転倒に関する調査について、論文を作成し、投稿した(現在、査読中)。
- 3-1. 「若年女性がん患者の妊孕性温存に関する意思決定支援統合ケアモデルの開発」のうち、看護師を対象にした質的研究の論文は採択された(矢ヶ崎, 他, 2017)。
- 3-2. 上記研究課題のうち、患者を対象にした調査は「乳がん女性の妊孕性温存に関するカウンセリングの体験」は質的研究を投稿、採択された。(Komatsu, et al, 2017)
4. コミュニティの高齢者を対象に身体活動の効果や実態等について、質的研究を実施した投稿し、採択された(Komatsu, et al. 2017)。
5. 「超高齢者の健康長寿研究(新村班)」の一部として、地域在住超高齢者(95歳以上)を対象とした質的研究を実施した。研究協力者の自宅へ訪問し、インタビュー調査を行った。データ分析、論文作成を進め、投稿した(現在、査読中)。
6. その他: 2015年から取り組んできたアジアパシフィックの10カ国との共同研究「アジア太平洋地域におけるがん治療後の患者に対するサバイバーシップケア」に関する2つの論文が採択された(Chan R, et al. 2017; Molassiotis, et al. 2017)

2. 今後の課題、展望

倫理指針の改訂(「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」等)による審査の影響を考慮して早めに準備を進める。また、多分野の国際的な研究の動向を把握し、臨床や社会に具体的に貢献できる研究を遂行する。

3. 2017年度の業績

【受賞】義塾賞(小松浩子)

【学術論文】

1. Komatsu, H., Yagasaki, H., Hamamoto, Y., Takebayashi, T. Falls and physical inactivity in patients with gastrointestinal cancer and hand-foot syndrome Asia-Pacific Journal of Oncology Nursing. (in press)
2. Yagasaki, H., Komatsu, H., Soejima, K., Naoki, K., Kawada, I., Yasuda, H., Hamamoto, Y. Targeted therapy-induced facial skin toxicities: Impact on quality of life in cancer patients. Asia-Pacific Journal of Oncology Nursing. 2018, 5(2): 172-177.
3. Komatsu, H., Yagasaki, K., Yamauchi, H. Fertility decision-making under certainty and uncertainty in cancer patients. Sexual and Reproductive Healthcare. 2018, 15 : 40-45
4. Komatsu, H., Yagasaki, K., Saito, Y., Oguma, Y. Regular group exercise contributes to balanced health in older adults in Japan: A qualitative study. BMC Geriatrics. 2017, 17(1):190
5. Chan, R. J., Yates, P., Li, Q., Komatsu, H., Lopez, V., Thandar, M., Chacko, S. T., et al. STEP study collaborators. Oncology practitioners' perspectives and practice patterns of post-treatment cancer survivorship care in the Asia-Pacific region: Results from the STEP study. BMC Cancer. 2017, 17(1):715
6. Molassiotis, A., Yates, P., Li, Q., So, W. K.W., Pongthavornkamol, K., Pittayapan, P., Komatsu, H., et al. Mapping unmet supportive care needs, quality-of-life perceptions and current symptoms in cancer survivors across the Asia-Pacific region: Results from the International STEP Study. Annals of Oncology. 2017, 28(10) : 2552-2558
7. 矢ヶ崎香, 小松浩子, 森明子. 若年乳がん女性のがん治療と妊孕性の意思決定支援に対する看護師の認識. 日本生殖看護学会誌. 2017, 14(1):21-29

抑うつ状態にあるがん患者をケアする看護師のための教育プログラムの開発と評価

福田 紀子 慶應義塾大学看護医療学部 准教授
野末 聖香 慶應義塾大学看護医療学部 教授

A. 目標

患者の抑うつ状態のアセスメントとケア能力を高めるための看護師を対象とした教育プログラムの有用性、実践への適応可能性について評価する。

B. 計画および実施過程

プログラムは2つの大学病院の血液内科病棟に勤務する46名の看護師に適用した。プログラム受講前、受講直後、受講1ヶ月後の3時点で、看護師の知識、患者への対応の困難感、コミュニケーションの自己効力感の変化から評価を行った。分析の結果、看護師の知識得点、患者への対応の困難感得点、コミュニケーションにおける自己効力感の得点が受講後に改善していた。この結果について、ベストプラクティスセンター報告会で発表した。



「がん患者の抑うつ状態に対する精神看護専門看護師によるケアの効果」に関する研究

野末 聖香 慶應義塾大学看護医療学部 教授
福田 紀子 慶應義塾大学看護医療学部 准教授

A. 目標

公表済の「がん患者の抑うつ状態に対する精神看護専門看護師によるケアの効果」を OPEN RESEARCH FORUMにて発表し、参加者からフィードバックを得て次の段階の研究を検討する。

B. 計画および実施過程

2017年11月22日(水)、23日(木・祝)に開催された慶應義塾大学 SFC OPEN RESEARCH FORUM(東京ミッドタウン)にてポスター展示し、参加者と意見交換した。



超高齢社会に求められる高齢者支援方法の開発

太田 喜久子 慶應義塾大学看護医療学部 教授
増谷 順子 首都大学東京健康福祉学部 准教授
真志田祐理子 慶應義塾大学看護医療学部 助教

A. 目標

高齢者の健康増進と、QOL の維持・向上を目指した支援方法を開発し、実践の場への適用と普及に向けた取り組みを行う。

B. 計画および実施過程

1. 地域高齢者を対象とした園芸活動の効果
2. 介護ロボット開発と評価に関わる研究

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

1) 地域高齢者を対象とした園芸活動の効果

地域高齢者を対象とした園芸活動の効果を検証するため、地域で暮らす高齢者 15 名を対象として園芸活動を 6 週間実施した。その結果、介入後の GDS-R (抑うつ)、主観的 QOL の得点が有意に改善した。この研究結果の一部は第 19 回日本認知症ケア学会大会にて報告した。

2) 介護ロボット開発と評価に関わる研究

介護ロボットの開発に参画しながら、介護者と被介護者、開発者の三者の視点を踏まえた評価ツールの作成を行っている。2017 年度は、地域住民や現場でのニーズを把握するために市民公開シンポジウム「地域で暮らす人々とロボットとの共生」を実施した。終了後に回収したアンケートでは、幅広い年代から介護ロボットの活用に対する意見が得られた (参加者 27 名, 回収率約 80%)。

2. 今後の課題、展望

地域高齢者を対象とした園芸活動の効果を検証するため、さらに研究対象者数を増やし、長期的な経過も見ていく必要がある。また介入群と対照群を設定し、園芸活動の効果を検証することも必要である。また介護ロボットに関わる研究においても、引き続き開発過程に参画し、評価項目及び評価の視点を検討していく。

3. 2017 年度の業績

- 1) 座長：太田 喜久子 (2017) 市民公開シンポジウム「地域で暮らす人々とロボットとの共生」, 第 76 回日本公衆衛生学会総会 (鹿児島).
- 2) 増谷 順子, 太田 喜久子, 真志田 祐理子 (2018) 認知症予防として園芸活動の可能性—地域高齢者を対象として—, 第 20 回日本認知症ケア学会大会 (新潟).

遺伝性腫瘍患者・家族に対する看護支援の開発に関する研究

武田 祐子 慶應義塾大学看護医療学部 教授
高畑 和恵 慶應義塾大学看護医療学部 助教

A. 目標

遺伝性腫瘍患者・家族に対して、適切な医療の活用によるがん死の回避と、QOL向上に寄与する看護支援を開発し、提供のための基盤を構築する。

B. 計画および実施過程

- 1) 臨床遺伝看護分野の継続教育プログラムの開発 (研究代表者: 中込さと子 山梨大学)
- 2) 消化管良性多発腫瘍好発疾患の医療水準向上のための研究 (研究代表者: 石川秀樹 京都府立医科大学)

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

- 1) がん看護領域に焦点を当て、遺伝看護学的な看護実践活動に関する学習意欲に関してがん専門看護師 (CNS) を対象に調査した。現在のがん看護 CNS の遺伝臨床において期待される役割と参加度の実態、遺伝看護実践能力向上に対する動機と関心度の程度に関する実態について自記式質問紙調査を作成し、郵送法により 606 通発送し 115 通の回答を得た (回答率 19%)。また、臨床の看護実践活動上の問題や課題、関連する要因についての多方面の意見を聴取するため、Focus・Group・Interview (FGI) を実施した。参加者は 9 名。大阪 1 回、東京 2 回、約 2 時間の FGI を実施した。
- 2) 研究班で作成の消化管良性多発腫瘍好発疾患ガイドラインに反映させるため、患者の身体面のみならず精神・社会的側面を含む様々な生活上の負担・支障などについて、当事者団体を中心に情報収集を行った。

2. 今後の課題、展望

- 1) 質問紙調査及び FGI による結果を分析中であるが、第 17 回日本遺伝看護学会学術大会で報告するとともに、その結果に基づく教育プログラムを開発し、実施、効果の検証を行う予定である。
- 2) 当事者としての生活実態と重症度分類との整合性を確認するとともに、患者会・患者支援として、ガイドラインや拠点診療施設に関する情報提供を行う。

3. 2017 年度の業績

1. 武田祐子【遺伝性がんはここまで解明された】遺伝性腫瘍 遺伝カウンセリングの実態, 成人病と生活習慣病, 47 巻 7 号, pp.820-824, 2017
2. 岡崎充美、中島健、高津美月、小林容子、高畑和恵、武田祐子、患者会と医療機関の共催による FAP セミナーの開催 第 5 回日本家族性大腸腺腫症研究会学術集会 2017 年 9 月 (国立がんセンター)

レジリエンスと思いやりを構築する医療従事者へのマインドフルネス (Mindfulness for health professionals building resilience and compassion : MHALO プログラム) の開発

朴 順禮 慶應義塾大学看護医療学部 専任講師
瀧田 結香 慶應義塾大学看護医療学部 助教

A. 目標

がん患者および家族、医療従事者への効果的な介入方法の研究・開発・実践・普及を推進するとともに、医療や社会へ心のケアの実践と普及を目指す。

B. 計画および実施過程

- 1) 医療従事者へのマインドフルネスプログラムの開発
- 2) マインドフルネスに関するワークショップ等の実施

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

- 1) 医療従事者へのマインドフルネスの活用：レジリエンスと思いやりを構築する医療従事者へのマインドフルネス Mindfulness for Health professionals building Resilience and Compassion: MHALO プログラムを開発し、実施可能性に関する研究を行った。結果、緩和ケアに携わる医療従事者 26 名がプログラムを完遂し、バーンアウトの有意な改善、レジリエンス、セルフ・コンパッション、マインドフルネス傾向、well-being の有意な増加、ストレスおよび感情状態の有意な改善が確認された。92% がプログラムへの参加に満足し、96% が仕事や日常に役立つと回答した。MHALO プログラムは実施可能性が高く、緩和ケアに係わる医療従事者にとって有効なプログラムである可能性が示唆された。
- 2) ワークショップ等の実施：合計 5 回のワークショップおよびシンポジウムを実施した。

2. 今後の課題、展望

引き続き MHALO プログラムの効果研究 (RCT) 遂行とがん患者への更なる応用を目指す。

3. 2017 年度の業績

【学会報告】

- ・ 朴 順禮、藤澤 大介、佐藤 寧子、佐渡 充洋、瀧田結香他、乳がん患者へのマインドフルネス認知療法の有効性—無作為化比較試験—、第 30 回日本サイコオンコロジー学会総会 2017 年、東京。
* ベストポスター賞 受賞
- ・ 朴 順禮、がん患者へのマインドフルネス—乳がん患者のマインドフルネス教室(MBCT)介入について—、第 22 回日本緩和医療学会学術大会シンポジウム 2017 年、横浜
- ・ 田村法子、朴 順禮、藤澤 大介、佐藤 寧子他、レジリエンスと思いやりを構築するマインドフルネス・プログラムの主観的効果、第 6 回ポジティブサイコオンコロジー医学会、2017 年、東京

- ・小杉哲平、佐渡充洋、二宮朗、朴順禮他. 健常者と精神疾患患者に対するマインドフルネスによる well-being の改善についての単群前後比較効果研究. 第 113 回日本精神神経学会学術総会、2017 年、名古屋

【論文】

- ・Park S,Sado M,Fujisawa D,et all. Mindfulness-based cognitive therapy for Japanese breast cancer patients—a feasibility study. Jpn J Clin Oncol. 2018 Jan 1;48(1):68-74.
- ・藤澤大介、朴 順禮、佐藤寧子、瀧田結香他
慶應義塾大学病院におけるがん・緩和ケア領域のマインドフルネス介入の取り組み .Japanese Journal of Mindfulness, 2017, Vol. 2, No. 2
- ・佐渡充洋、二宮朗、小杉哲平、朴 順禮他
大学病院におけるマインドフルネス認知療法の取り組み：不安障害、ウェルビーイングを中心に、Japanese Journal of Mindfulness, 2017, Vol. 2, No. 2
- ・朴 順禮. マインドフルネスを活用したセルフメンタルケア、Cancer Board. 2017 年、医学書院 p.52—55
- ・朴 順禮. 患者のためのマインドフルネスの実践、Cancer Board. 2018 年、医学書院 p.52—55
- ・恒藤 暁、朴 順禮. 実践レポート：医学教育学プログラムにおけるマインドフルネス、Cancer Board. 2018 年、医学書院 p.76—87
- ・朴 順禮. 死の臨床に立つ医療者の語りから、隔月刊 エンド・オブ・ライフケア. 2018 年、日総研 p.90—93

【その他】

- ・マインドフルネスワークショップ、佐渡 充洋、二宮 朗、朴 順禮他 第 17 回日本認知療法・行動療法学会、2017 年、東京.
- ・恒藤 暁、朴 順禮、文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラム「現場で働く指導医のための医学教育学プログラム 基礎編」マインドフルネスワークショップ講師. 京都大学大学院医学研究科医学教育推進センター、2017 年、京都.
- ・朴 順禮. 京都府双方向遠隔講義による専門的緩和ケア遠隔推進事業「緩和ケアにおける学際的アプローチ：マインドフルネス」講師、2017 年、京都.
- ・恒藤 暁、朴 順禮. ワークショップセミナー講師「マインドフルネスをがん診療に活かす」、医学書院、2017 年、東京.
- ・瀧田結香. 難病ネットワーク主催ワークショップ講師 「マインドフルネスを体験してみよう」、2017 年、東京

肺高血圧症患者の精神状態・QOL とその関連因子に関する研究

瀧田 結香 看護医療学部 助教

A. 目標

特発性肺動脈性肺高血圧症（I P A H）患者および慢性肺血栓性肺高血圧症（C T E P H）患者の精神状態（抑うつ・不安）、QOL、日常生活上の困難を横断的に明らかにするとともに、治療開始前の初診患者に対しては発症後 2 年間の状態を縦断的に調査して治療時期に応じた最良の看護実践を開発し提供する。

B. 計画および実施過程

メンバー：【看護医療学部】瀧田 結香
【医学部】片岡 雅晴、川上 崇史（循環器内科）、藤澤 大介（精神神経科）
【看護部】中野直美（内科外来主任看護師）

- 1) うつ・不安の状態と身体症状ならびにスピリチュアルな側面を含む QOL の状態を以下の尺度を用いて調査する。
 - ・抑うつ状態：Patient Health Questionnaire (PHQ-9)
 - ・不安状態：Generalized Anxiety Disorder (GAD-7)
 - ・身体症状ならびにスピリチュアルな側面を含む QOL：
Functional Assessment of Chronic Illness Therapy-Spiritual Well-Being (FACIT-SP)
 - ・全般的 QOL：MOS-Short form 12 (SF-12)
 - ・精神疾患有病率：Mini-International Neuropsychiatric Interview (M.I.N.I) 精神疾患簡易構造化面接法
- 2) インタビューガイドをもとに半構造化面接を行い、患者が抱く思いや日常生活上の困難・苦痛およびニーズを明らかにする。
- 3) 治療開始前の対象者は、初回調査後 6 か月後、1 年後、2 年後にも上記 1) 2) の調査を継続的に実施する。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

医学部および看護医療学部の研究倫理審査で承認を得て調査を開始し、2018 年 3 月 15 日現在 60 名の調査を完了している。

2. 今後の課題、展望

引き続き、残る 40 名（計 100 名）の調査を進め、分析を行っていく。また、分析結果をもとに、日常生活上の苦痛・困難に関連する更なる研究実施に向けて準備を進めていく予定である。

「先導ナースの養成プログラム」の開発・検証

小池 智子 慶應義塾大学看護医療学部 准教授

A. 目標

本部門は、看護サービスの開発・質改善を担う「ベストプラクティス先導ナース」に必要な力を高めるため「ベストプラクティス推進プログラム」、「ケース・メソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム」を運営し、①プログラム改訂・教材の開発、②プログラムによる教育・提供を研修の提供、③効果の検証、④成果の発信を行っている。

B. 計画および実施過程

1. ベストプラクティス導入・活用プログラム

①組織が置かれている外部環境および自組織の内部環境の分析を踏まえ、ビジョンと戦略を明らかにする。②課題の現状分析と要因分析を行い、優れた実践例（ベストプラクティス）等も参考に複数の改善策を比較検討し、実施計画を立案し、③適切な目標・評価指標を設定し、プロセス評価・アウトカム評価を行う。医療機関の部署等において約1年の①～③を実施し活動評価を行った。高い成果を達成した活動については、④標準化を図っている。

2. ケース・メソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム

- 1) ケース教材の改定、今日的な看護マネジメント課題を素材にしたケース教材を開発し、授業・研修で用い、授業・研修の効果を評価した。
- 2) 2016年より SFC 研究所ケースメソッド・ラボのメンバーとして看護分野のケース作成に参画。2017年より「ケースとデータに基づく病院経営人材育成」（文部科学省課題解決型人材養成プログラム）の病院経営ケース作成タクスフォースの委員として、ケース作成を行っている。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

1) 「ベストプラクティス導入・活用プログラム」の実施と評価

- (1) 1つの認定看護管理者教育課程の他、2医療機関で改定した研修プログラムを実施し、計25部署が約8ヶ月～1年間、医療安全・感染管理・看護サービス・労働安全衛生等に関する改善活動に取り組んだ。25部署の活動評価（中間・成果発表、成果資料）を分析し、①ベストプラクティスの探索・活用の増加、②適切な Process 指標と Outcome 指標の設定と評価の実施割合の増加、③標準化に至る効果的な活動が増加している。

2) 「ケース・メソッドによるマネジメント能力育成プログラム」

(1) ケース教材の検討・開発

これまでに開発したケース教材について、制度改革等の医療環境の変化を反映した内容に改定した。

(2) ケース・メソッド教育による授業・研修の実施

開発したケース教材を使用し、1つの大学、3つの大学院（管理・政策分野）でケース・メソッド教育を用いた授業を行った他、認定看護管理者教育課程のファーストレベル3ヶ所、セカンドレベル3ヶ所、サードレベル2ヶ所、職能団体研修会2ヶ所において研修を行った。

(3) 評価・効果検証

授業・研修終了後、授業計画と受講者評価（内容方法、習得・達成内容等）を分析した結果、①問題の分析力、②解決策を比較検討する統合力、③説明力の能力養成において「効果的である」と9割以上が評価している。一方で、①～③の達成については8割が課題があるとしており、特に「③説明力」を課題とするものが多かった。大学院のコースでは、3～5ケースを用いてケースメソッド授業を行っているが、認定看護管理者教育課程では、1ケースのセッションがほとんどであるため、①～③の能力の養成は難しい。教育課程において、分析力、思考力を鍛えるケースメソッド授業を複数回、導入することを提案していく。

2. 今後の課題、展望

「ベストプラクティス推進プログラム」と「ケース・メソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム」は、効果の検証を引き続き行い、内容の改善をすすめるとともに、普及に向けた活動（ワークショップ、テキスト作成など）を行う。

3. 2017年度の業績

【関連論文・学会発表等】

- 1) 小池智子 (2017) 地域に根ざした強靱な看護マネジメントの創出, 看護管理 27(1), p22-25.
- 2) 小池智子・森臨太郎 (2017) 政策を「つくる」「動かす」ための看護管理者と看護研究者の役割, 看護管理 27(8), p644-649.
- 3) 小池智子 (2017): 今、求められるトランジショナル・ケアとは : 特集 トランジショナル・ケアの実践, 看護展望 ;42(10),p942-947.
- 4) 小池智子 (2017) 看護管理の「シンカ」第 21 回日本看護管理学会学術集会 ,p78 (横浜)
- 5) 岡田直子, 先原久美恵, 金光美由紀, 小林晶子, 森文子, 小池智子 (2017) 問題解決の思考過程と方法論を活用して現場に変化をもたらす取り組み -6年間の院内看護管理者教育の実践報告-, 第 21 回日本看護管理学会学術集会 ,p324 (横浜)
- 6) 橋谷典子, 小池智子 (2017): フランスの在宅入院制度におけるがん化学療法の現状, 第 21 回日本看護管理学会学術集会 ,p318 (横浜)
- 7) 片岡美樹, 加藤理恵子, 山澤美樹, 鎮目美代子, 小池智子 (2017) 看護師の発達レベル別にみた退職理由とコミットメント, 第 21 回日本看護管理学会学術集会 ,p281 (横浜)
- 8) Tomoko Koike (2017) Preparation for Professional Practice in Japan including leadership and innovation, Conference of Suffolk University, Ipswich, UK.

【その他】

第 21 回日本看護管理学会学術集会 (2017 年 8 月 19・20 日横浜開催: 参加者数 4,800 人) の学術集会長をつとめる

臨床倫理における看護師の役割と支援システムの構築

宮脇美保子 慶應義塾大学看護医療学部 教授

A. 目標

・臨床倫理における看護師の役割と支援システムの構築

臨床倫理における看護師の役割を質的研究により明らかにする。

B. 計画および実施過程

・臨床倫理における看護師の役割と支援システムの構築

- 1) チーム医療の中で看護師に求められる倫理的役割に関する文献検討。
- 2) チームに医療において、看護師が果たす倫理的役割に関する情報収集のための海外視察。
- 3) 研究課題についてのインタビュー調査およびデータ分析。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

・臨床倫理における看護師の役割と支援システムの構築

- 1) 2017年10月20日－23日、バンコクで開催された The TNMC(タイ看護・助産学会) & WANS(世界看護科学学会) Conference 2017 において、「The role of nurses and needs for clinical ethics support in healthcare setting」について発表した。
- 2) 学会活動の一環として、「病院倫理委員会コンサルタント連絡会議」のメンバーとして倫理コンサルテーションシステム構築のための準備にかかわった。
- 3) 臨床倫理のあり方について検討している病院における講演活動。



The TNMC(タイ看護・助産学会) & WANS(世界看護科学学会) Conference 2017

2. 今後の課題、展望

- ・ケアリング文化の醸成
- ・倫理コンサルテーションシステムの構築

- 1) 次年度は、新たに倫理に関する看護師のリーダー養成を目指す研究課題に取り組む。

3. 2017年度の業績

- 1) 宮脇美保子 (2017): 今、なぜ看護倫理が大切か - 看護は誰のために、何のために行うのか、Nursing Business, pp10—13
- 2) 宮脇美保子: 「倫理に基づく看護実践」、東京都看護協会主催研修会講師、2017年7月18日
- 3) 宮脇美保子: 看護職と倫理(管理者編)、沖縄県看護協会主催研修会講師、2017年7月25日
- 4) 宮脇美保子: 「看護倫理の事例検討」、広島大学病院看護部主催研修会講師、2017年8月17日
- 5) 宮脇美保子: 「看護実践の倫理」、愛知県看護協会主催研修会講師、2017年11月2日
- 6) 宮脇美保子: 「看護教育現場における倫理」神奈川県立衛生看護専門学校 FD研修、2017年3月13日

外来患者に対する在宅療養支援に関する研究

永田 智子 慶應義塾大学看護医療学部 教授

A. 目標

本研究では、外来通院中の患者を対象とし、外来における効率的なニーズ把握とケアマネジメントの方策を検討することを目的とする。

B. 計画および実施過程

本研究は 2015 年度から文部科学省科学研究費により継続的に実施している。これまでに、外来看護師による在宅療養支援に関する全国調査、外来看護師の在宅療養支援ニーズ把握に関する質的研究とその結果を用いた調査、1 病院の外来看護師を対象とした在宅療養支援に関する認識の調査等を実施してきた。2017 年度は主に以下を実施した。

- 1) 2016 年度までに実施した外来看護師による患者の在宅療養支援ニーズの把握方法等に関する調査結果をまとめ、広く公表する。
- 2) 1 特定機能病院の患者における在宅療養支援ニーズの実態に関する調査を行う。
- 3) 1 特定機能病院の外来における、患者の在宅療養支援のためのカンファレンスの実施方法について検討する。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

- 1) 調査結果の公表・周知

外来看護師による在宅療養支援について、日本地域看護学会でワークショップを開催するとともに、現時点での研究成果を見やすくまとめた「外来での在宅療養支援」のホームページを作成した。現在、内容の拡充を進めている。

<http://gairaizaitaku.yupia.net/>

- 2) 特定機能病院の外来患者における在宅療養支援ニーズの実態に関する調査

1 特定機能病院の外来通院中の患者 468 名 (有効回答率 77.8%) に対し、外来の待ち時間を用いて質問紙調査を行った。あわせて、外来看護師による在宅療養支援の必要性の判断も行った。その結果、外来看護師が、病状や医療処置への支援、治療継続のための支援、意思決定のための支援、在宅サービス利用への支援等の実施が必要と判断したのは、全体の 214 名 (45.7%) だったが、実際に支援を受けていたのは 75 名だった。一方、患者側が「今後、自宅での療養が困難になる」と感じているのは全体の 149 名 (32.3%) であった。看護師側は、ADL や認知機能に基づき在宅療養支援の必要性を判断していたが、患者側はそれに加えてソーシャルサポートの多寡により在宅療養の困難さを感じていた。

- 3) 外来における在宅療養支援のためのカンファレンスについて

1 特定機能病院において、昨年度までにカンファレンスのためのマニュアルを作成しており、現在改定のためのワーキンググループを継続している。

2. 今後の課題、展望

在宅療養支援ニーズを有する外来患者に関する調査を他の病院でも実施し、外来でのニーズ把握と対応の必要性を明らかにするとともに、ニーズ把握とその後の対応に関する院内のシステムの在り方について検討する。調査については対象病院の検討を行っており、院内のシステム構築については、学会でのワークショップを開催して、先進事例についての情報収集を継続する。

3. 2017年度の業績

〔雑誌論文〕

1. 錦織梨紗, 永田智子. 外来看護師による在宅療養支援ニーズ把握の実態: 一般病院を対象とした全国調査. 日本地域看護学会誌, 20(2), 29-37, 2017
2. 佐藤日菜, 田口敦子, 永田智子, 山内悦子, 浦山美輪, 戸村ひかり, 鷲見尚己. 特定機能病院における外来看護師による在宅療養支援の実態. 日本地域看護学会誌, 20(2), 80-86, 2017

〔学会発表〕

1. 角川由香, 成瀬昂, 永田智子. 外来患者への在宅療養支援の実態に関する全国調査—退院支援部署による外来患者への支援に焦点を当てて—. 第37回日本看護科学学会学術集会, 2017年
2. 剣持麻美, 松永篤志, 田口敦子, 佐藤日菜, 山内悦子, 菅野エリ子, 浦山美輪, 永田智子. 退院後在宅療養を継続できた患者に対し、医療スタッフが行ったケアの特徴とそれを可能にした要因. 第20回日本地域看護学会学術集会, 2017年
3. 前田明里, 角川由香, 永田智子. 外来看護師が患者の在宅療養支援のニーズに気づくために収集している情報. 第20回日本地域看護学会学術集会, 2017年

なお、これらの研究は、平成26～28年度文部科学省科学研究費基盤B「外来受診患者の潜在的在宅ケアニーズの早期把握及び対処方策の開発」および平成29～31年度基盤B「外来患者の在宅療養支援に向けた対処方策の開発とシステム化」によって実施した。

2017年度 看護医療学部

看護ベストプラクティス研究開発・ ラボ研究報告会

昨年度に引き続き、看護ベストプラクティスのメンバーによる研究報告会を年2回開催しました。

第3回はプロジェクトAから、第4回はプロジェクトCからの報告でした。

- ・プロジェクトA：看護実践の質保証研究開発
- ・プロジェクトB：ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発
- ・プロジェクトC：倫理的看護実践のためのシステム構築

第3回研究報告会

日時：2017年7月18日(火) 17時30分～19時00分
会場：慶應義塾大学 信濃町キャンパス 孝養舎202教室
参加費：無料
報告部門：プロジェクトA：看護実践の質保証研究開発

【報告者】

1. 福田紀子 (プロジェクトA)

「抑うつ状態にあるがん患者をケアする看護師のための教育プログラムの開発と評価」

2. 瀧田結香 (プロジェクトA)

「肺高血圧症患者における身体活動の実態および精神状態・QOL とその関連因子に関する研究」

看護医療学部
看護ベストプラクティス研究開発・ラボ
-第3回研究報告会-

看護ベストプラクティス研究開発・ラボでは、3つのプロジェクトに分かれて研究を推進しています。プロジェクトAは、「看護実践の質保証研究開発」、プロジェクトBは、「ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発」、プロジェクトCは、「倫理的看護実践のためのシステム構築」です。今回は、プロジェクトAから2題、研究報告を予定しています。

日時：2017年7月18日(火) 17時30分～19時00分
会場：慶應義塾大学 信濃町キャンパス 孝養舎202教室
参加費：無料

報告者：
1. 福田紀子(プロジェクトA)
「抑うつ状態にあるがん患者をケアする看護師のための教育プログラムの開発と評価」
2. 瀧田結香(プロジェクトA)
「肺高血圧症患者における身体活動の実態および精神状態・QOLとその関連因子に関する研究」

プレゼンテーション終了後、
研究内容についてのディスカッションを予定しております。

セミナーへの参加は自由です。関心のある方に声をかけて下さい。
問い合わせ先 Email: mmiyawa@sfc.keio.ac.jp

Laboratory on Innovative Research and Practices for Nursing
Keio University Faculty of Nursing And Medical Care

看護医療学部
看護ベストプラクティス研究開発・ラボ
-第4回研究報告会-

看護ベストプラクティス研究開発・ラボでは、3つのプロジェクトに分かれて研究を推進しています。プロジェクトAは、「看護実践の質保証研究開発」、プロジェクトBは、「ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発」、プロジェクトCは、「倫理的看護実践のためのシステム構築」です。今回は、プロジェクトCから2題の研究報告を予定しています。

日時：2018年1月29日(月) 17時30分～19時00分
会場：慶應義塾大学 信濃町キャンパス 孝養舎202教室
参加費：無料

報告者：
1. 木下ユリコ
「在宅療養生活における夜間の介護状況に関する研究」
2. 永田智子
「退院支援と在宅療養支援」

プレゼンテーション終了後、研究内容についてのディスカッションを予定しております。

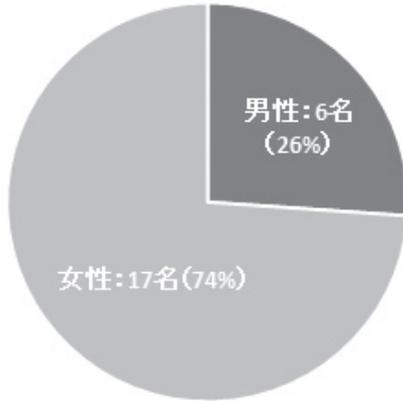
セミナーへの参加は自由です。関心のある方に声をかけて下さい。
問い合わせ先 Email: mmiyawa@sfc.keio.ac.jp

Laboratory on Innovative Research and Practices for Nursing
Keio University Faculty of Nursing And Medical Care

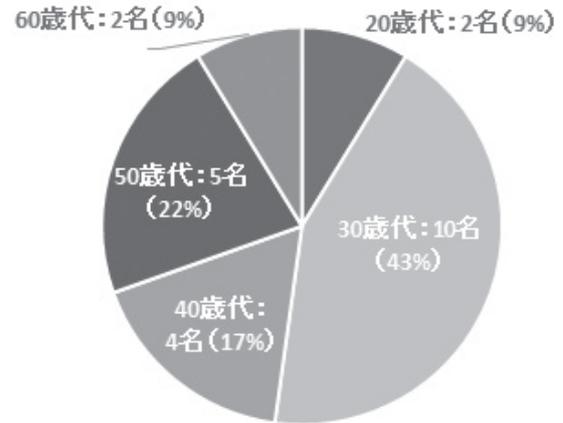
「第3回研究報告会」アンケート結果

(参加者 36 名、アンケート回収数 23 枚)

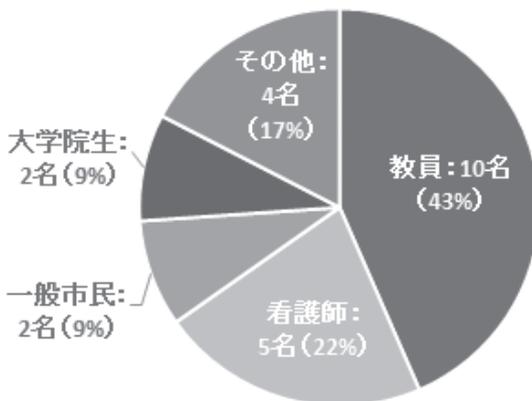
I. 性別



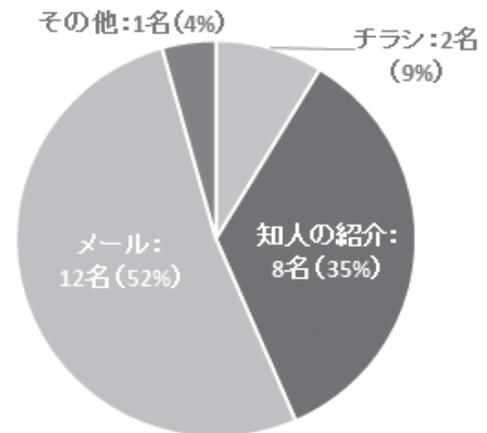
II. 年齢



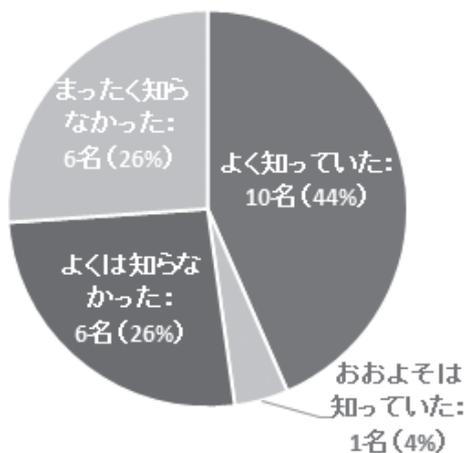
III. 職業



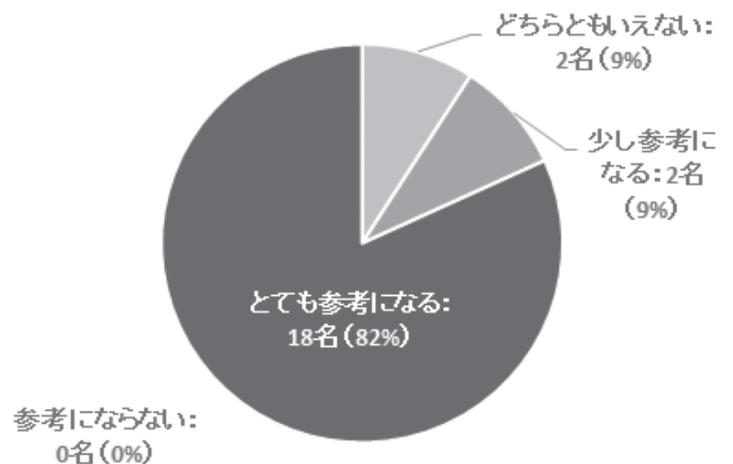
IV. 今回の報告会は、どのような方法で知りましたか



V. ベストプラクティス研究開発ラボラトリの研究報告会についてご存知でしたか



VI. 今回の報告会は、今後の参考になりましたか



VII. 感想・ご意見

- ・看護に関して勉強する機会として、非常に貴重でした。ありがとうございました。
- ・研究の実践への応用などについても、発表者に提示してもらおうと思います。
- ・教育プログラムの開発は、たくさんのデータの必要性を改めて実感しました。がん患者さんへのアプローチの困難さ、緊張感、チームとして確立していただきたいと思います。
- ・興味深いテーマです。ありがとうございます。
- ・とても有意義な学びとなっております。ありがとうございました。
- ・健康マネジメント研究科でこれから本格的に研究をしていく身として、すごく勉強になりました。ありがとうございました。
- ・看護師の教育と、患者への看護師のかかわりと、異なる点での発表を聞くことができ大変勉強になりました。
- ・患者会の方の実際のコメントが聞けて良かった。
- ・他の施設でも参考となるような資料を配布いただければありがたいです。

VIII. 期待することなど自由意見

- ・勉強になりました。これからも長くお続けくださいますようお願い申し上げます。
- ・患者さんへ寄りそうと申しますが、それぞれの業務に追われる毎日の中で、患者さん本位の考え方を学ぼうとしている研究会のお姿に感謝します。よけいなことは言わない、聞かない、かかわらないような看護が見受けられる現状もある中で、悩み、苦しみ、落ち込みながらも患者さんたちとのディスカッションを忘れない姿勢を高く評価いたします。
- ・個人的に聞きたいことも多かったので、交流会などがあると嬉しいです。
- ・もっと広くたくさんの方に参加いただいて、いろいろな意見が聞けるといいと思いました。とても勉強になる内容なので、多くの方に聞いてもらいたいです。
- ・このような発表が聞ける機会をもっと増やしてほしい。
- ・肺高血圧症患者が増え、年齢においても高齢化しており、このような研究が必要となるため、企画としても協力していきたい。

第4回研究報告会

日時：2018年1月29日(月) 17時30分～19時00分
 会場：慶應義塾大学 信濃町キャンパス 孝養舎 202 教室
 参加費：無料
 報告部門：プロジェクトC：倫理的看護実践のためのシステム構築

【報告者】

1. 木下ユリコ（プロジェクトC）

「在宅療養生活における夜間の介護状況に関する研究」

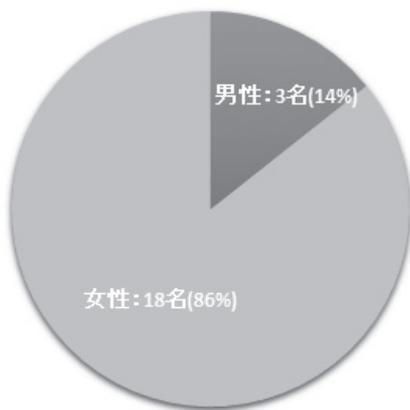
2. 永田智子（プロジェクトC）

「退院支援と在宅療養支援」

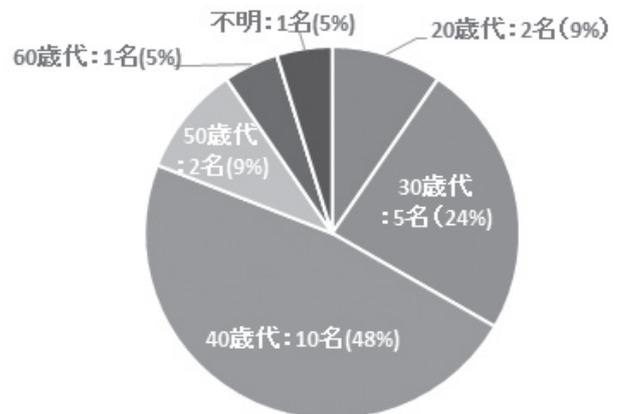
「第4回研究報告会」アンケート結果

(参加者 27 名、アンケート回収数 21 枚)

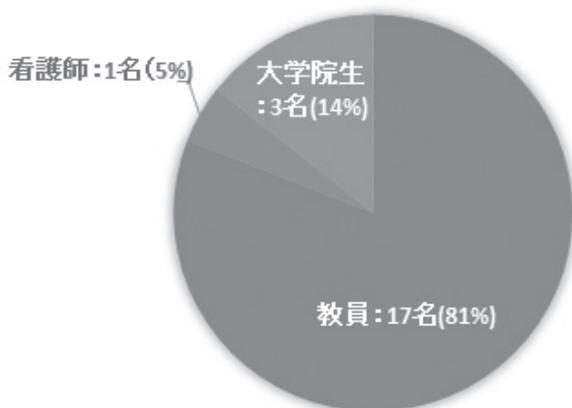
I. 性別



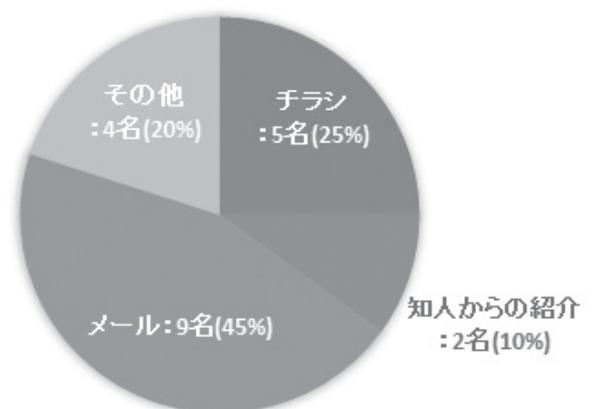
II. 年齢



III. 職業



IV. 今回の報告会は、どのような方法で知りましたか

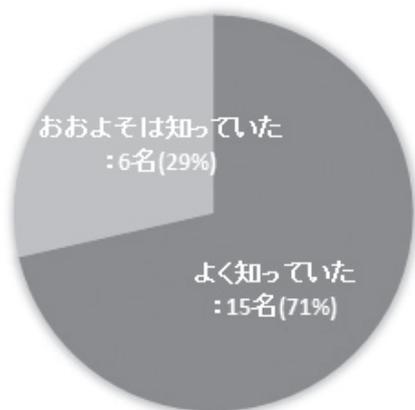


その他：

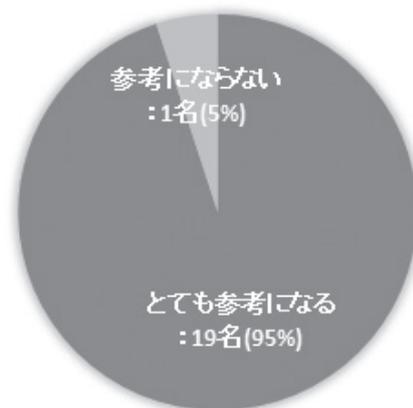
- ・学内の案内
- ・記載なし

V. ベストプラクティス研究開発ラボラトリの研究報告会についてご存知でしたか

「よくは知らなかった」「全く知らなかった」は0名



VI. 今回の報告会は、今後の参考になりましたか 「どちらともいえない」「少し参考になる」は0名



VII. 今回の報告会に関する感想、ご意見をご自由にお書きください

- ・ とても興味深い内容だった
- ・ リサーチクエスションから研究対象、方法などにつなげていく点が参考になった
- ・ 退院支援の歴史的背景も含めて、課題がよくわかった
- ・ 大変勉強になった
- ・ 専門分野外だが、時代の流れの中でとても重要なトピックであり、わかりやすく、興味深かった
- ・ 研究手法に関しても勉強になった
- ・ 実際の臨床に則した研究内容、発表内容で、非常に興味深かった
- ・ 在宅療養支援に関しては、今最も注目され、研究し甲斐のある分野だと思う。自分自身も介護者であるため、介護者、および看護師の両方の立場から発表を聴き、勉強になった
- ・ 外来での在宅療養支援の発展に期待している

VIII. 看護ベストプラクティス研究開発・ラボへ期待することなど、自由にご意見をお書きください

- ・ 実践と研究、教育の連携の必要性が可視化できる活動を、今後も期待している
- ・ 継続して、このような機会をつくっていくことが必要だと思う
- ・ 先生方が取り組んでいる研究を知る機会になるので、報告会の場を継続してほしい

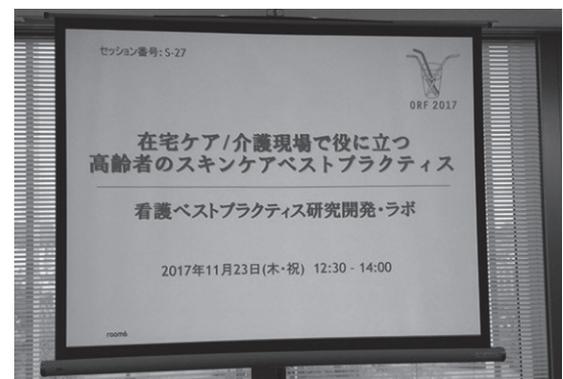
SFC Open Research Forum 2017

への出展・セッション



慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）で、研究活動成果を広く社会に公開する場として毎年開催する「SFC Open Research Forum (ORF)」に、展示とセッションで参画しました。SFC Open Research Forum 2017は、2017年11月22日（水）～11月23日（木）に東京ミッドタウン（六本木）で開催されました。

展示では、「がん患者の抑うつ状態に対する精神看護専門看護師によるケアの効果」「地域高齢者を対象とした園芸活動の効果」「遺伝性腫瘍患者・家族に対する看護支援の開発に関する研究」「わかばの会 ～若手研究者の活動と課題～」がそれぞれの活動をポスターで紹介し、わかばの会では活動の状況をスライドショーでも紹介しました。また、来場者に「看護のイメージ」を書いていただき、その提示をきっかけに意見交換をしながら、展示の説明もさせていただきました。



セッションは、11月23日（木）12時30分～14時00分に「在宅ケア/介護現場で役に立つ高齢者のスキンケアベストプラクティス」をテーマとして、プレゼンターは山本亜矢専任講師、コーディネーターは宮脇美保子教授で、東京ミッドタウンタワー 4F room6 で開催しました。

高齢者の皮膚は、菲薄化、弾力性の低下、ドライスキン等により、皮膚障害や損傷のリスクが高くなります。介護施設、在宅などで高齢者にかかわる者にとっては、医療・介護の専門職、非専門



合同プロジェクト

職を問わず、顕在的・潜在的なスキントラブルに対応するためスキンケアに関する知識と技術は必要不可欠です。しかし、高齢者に対するスキンケアは十分に行われているとは言えない現状があります。WOC ナース（皮膚・排泄ケア認定看護師）としても活躍している山本講師から、スキンケアに関する専門的知識と豊富な経験をもとに、高齢者の皮膚の特徴に関して解剖生理学的な視点から説明があり、その後、事例を交えて、失禁関連皮膚炎、スキン - テア（皮膚裂傷）などに関するスキンケアの実践方法について具体的な話を聞くことができました。

セッションは、具体的で最新の情報が得られる内容であり、参加者からは、「わかりやすかった」「高齢患者の皮膚のケア方法について疑問が多かったので学んでよかった」等の声が寄せられました。

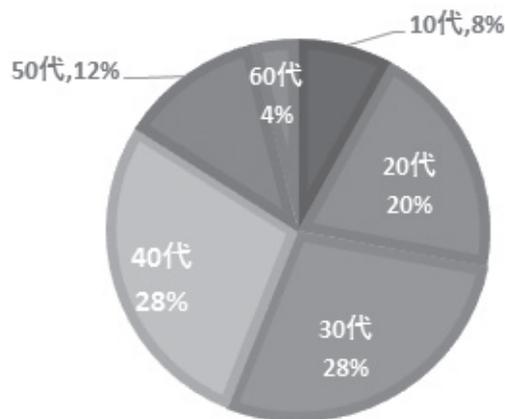


アンケート集計結果

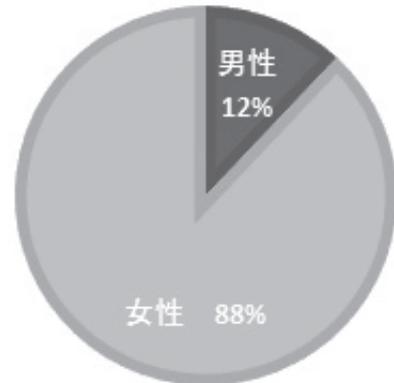
32名の参加があり、25名のアンケート結果を以下に示します。自由記載では「患者さんの皮膚のケアの方法について疑問が多かったので学んでよかった」という意見が寄せられました。

1. あなた自身について解答してください。

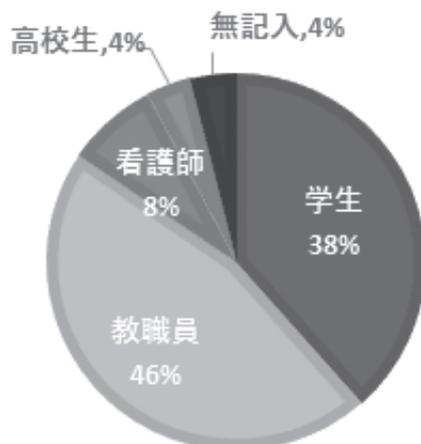
1) 年齢



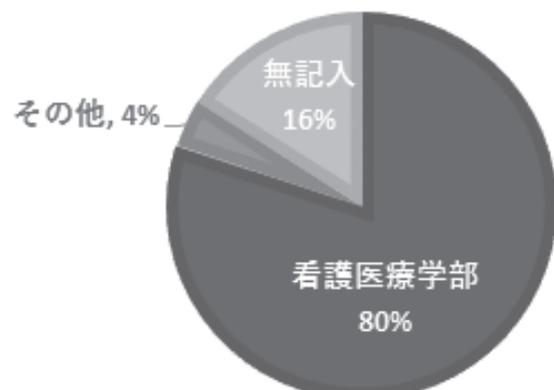
2) 性別



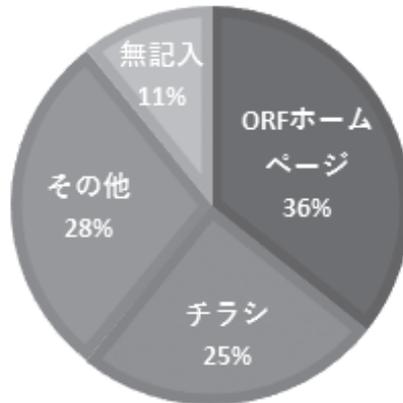
3) 職業



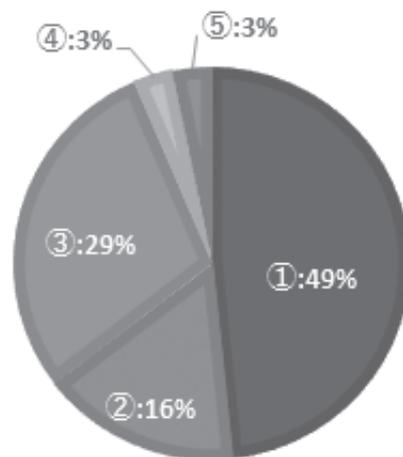
4) 所属



2. セッションを何で知りましたか。

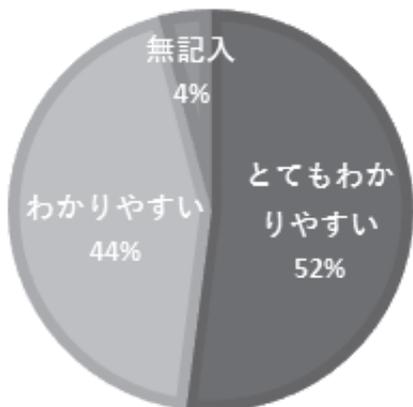


3. セッションに参加した理由は何ですか。

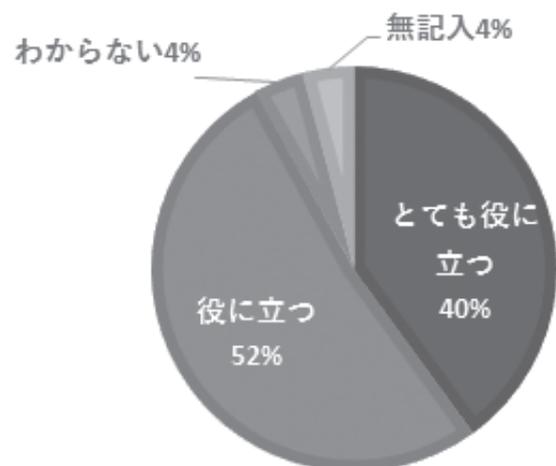


- ① テーマに興味があった
- ② 講師が良さそうだった
- ③ 家族や知人に誘われた
- ④ 会場が近い
- ⑤ その他
- ⑥ 無記入

4. セッションの内容はわかりやすいものでしたか。



5. セッションの内容は役に立つものでしたか。



若手研究者の会

わかばの会

慶應義塾大学看護医療学部 准教授 小山 友里江, 矢ヶ崎 香

慶應義塾大学看護医療学部 専任講師 新幡 智子

慶應義塾大学看護医療学部 助教 (有期)

伊藤 麻美, 井ノ下 心, 木下 コリコ, 小林 良子, 榊原 直喜, 佐藤 美樹,
高畑 和恵, 瀧田 結香, 田村 紀子, 西池 絵衣子, 真志田 祐理子, 緑川 綾

A. 目標

様々な専門分野の若手研究者が、柔軟な発想や活気あふれる行動力を基に、創造的に研究・教育に取り組み、これからの看護学の発展や大学教育の充実への貢献を目指す。

B. 計画および実施過程

若手教員が教育・研究の力を伸ばす上での課題について話し合い、それに基づいて今年度の活動計画を立案した。実施内容は下記の通りである。

2017年7月：課題の検討

2017年10月：勉強会の開催

2017年11月：ORFでの活動発表

毎月1回：わかばカフェの開催

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

1) 活動計画の検討

今年度の活動を検討するにあたり、昨年度に引き続き文殊カードを使用し、「若手教員が教育・研究の力を伸ばす上での課題とそれを克服するための対策」についてブレインストーミングを行った。その結果、「教育・研究に関する知識・スキル不足」、「他領域とのコミュニケーション不足」、「社会への発信力や機会の不足」などの多岐にわたる課題とともに、それに対する具体的な解決策のアイデアが挙げられた。これらの結果をもとに、重要度や優先度をふまえ、今年度は、教育に関する知識の向上や他領域とのコミュニケーションの機会を増やすために、勉強会を行うことや昨年度も実施したわかばカフェを活用し、他領域と教育に関して情報共有の場を設けること、また社会への発信力の向上を意図し、ORFでの発表方法を工夫することを計画した。

2)勉強会

今年度は、10月18日に「学生をどう理解し、支援するかー相談の受け方、日頃の関わり方ー」というテーマで野末聖香教授より講義をしていただいた。学生とのかかわりについて、「相談に来た学生がなぜ自分のところに来たのか」という視点を大切に、学生の話をよく聞くためにはどのようなことを理解することが大切なのか、具体的な方法も含めて学んだ。また、教員自身のセルフ・コントロールについても学ぶことができ、参加者からは、授業、演習、実習を担当するうえですぐに役立つ内容ばかりですぐに活かしていきたいという感想があった。

3)ORF

2017年度ORFでは、わかばカフェ開催や勉強会、今後の課題をポスターとしてまとめ、発表した。また、当日は新たな取り組みとしてブースを訪れた人に「看護のイメージ」を付箋に書いていただき、交流の機会とした。付箋は全56枚の意見が集まり、「優しい」「笑顔」「過酷」という職業に対するイメージの他、「医療処置をする」「寄り添う仕事」というような具体的な看護の仕事内容、また患者としての体験談をもとにした意見や職業への期待を込めた言葉が集まった。

4)わかばカフェの開催

メンバー個々が研究・教育の能力を高めていくことを目指し、研究や教育に関して、気軽に情報交換・相談できるよう、昨年に引き続き、毎月1回“わかばカフェ”を開催している。また、SFCと信濃町、2つのキャンパスでの教育を橋渡しする場として、有意義な機会となっている。

今年度は、主に各専門分野で担当している科目の内容や、学生への教育内容・教育方法について情報共有を行い、学部における看護基礎教育のあり方や課題、自分達の役割について意見交換をした。1年次、2年次（SFC科目）で学んだ講義や演習が、3年次（信濃町科目）の演習や実習にどのように活かされているのか、また授業構成や授業方法の共有など行うことで新たな視点での気づきにつながり来年度に活かすことができた。

2. 今後の課題、展望

- ・ 若手研究者・教員として切磋琢磨しながら学ぶ機会をもつことで、能力の向上に努める。
- ・ 様々な領域の看護学専門家で組織された集団であることを生かして、社会に貢献できるような研究・教育活動の実践を検討する。



